ART WORLD

アートの世界

アートが分からなければ21世紀は分からない？
アートの最前線へようこそ

text by Yasuaki Ishizaka | photograph by Shinji Minegishi

Andrew Hall
ヘッジファンド運営会社のアステンベックキャピタル主宰。英国に生まれる。1973年オックスフォード大学を卒業（化学）。80年にINSEADでMBA取得。92年フィブロ社CEOなどを歴任。

Christine Hall
アンドリュー・ホール夫人。英国に生まれる。2007年にアンドリューとともにホール美術財団を創立。06年にドイツのデルネブルク城を購入、展示スペースとする。

英国の彫刻家アントニー・ゴームリーの《アンダーマイスキン IV》（2002）。「人体とは記憶と変化の場所」と主張する人体彫刻の多くは自身を鋳型に制作される。

024-027_art.indd 24 2017/09/11 20:15:03

vol.9 **現代アートで蘇る12世紀の古城**

Andrew and Christine Hall — Derneburg

「神」と呼ばれたトレーダーが築いた現代アートの城を石坂泰章が探訪する。

ドイツ北部の都市ハノーヴァーは、18世紀にハノーヴァー選帝侯が英国王に即位している関係から、英国の雰囲気漂う都市でもある。また、2000年には万博が開かれ、坂茂の紙の建築による日本館が話題となった。今回訪ねたデルネブルク城は、そのハノーヴァーの南約50キロにある。約1000年前に修道院として建てられた同城は、その後1814年に貴族の居城となった。

この由緒ある城の現在の主は、米国の著名現代美術コレクターであるアンドリュー・ホール夫妻のホール美術財団だ。同財団は、ホール夫妻の5,000点におよぶコレクションを所蔵し、この城の他に米国ヴァーモント州の酪農場にも展示の拠点を持つ。さらに、米国マサチューセッツ現代美術館、英国オックスフォードのアシュモレアン博物館ともパートナーシップを結ぶなど、活動範囲はまさにグローバルだ。

ホール氏の経歴は実にまたユニークだ。コレクターには珍しい理系出身。オックスフォード大学で化学を専攻した後、商品取引のフィブロ社、ヘッジファンドのアステンベックキャピタルのトップとして名を馳せた。リーマンショックの際も相場を的確に読み、その翌年に約100億円のボーナスを手中にして話題をさらった人物でもある。

大のマスコミ嫌いとして知られるが、取材を申し込む際も、経済誌であるForbes誌の名前を出すや否や、かなりの拒絶反応が返ってきた。そのためか、ホール夫妻へのインタビューおよび写真撮影は一切不可。一般向けツアーに参加中の取材のみOK、というNG尽くしの中で取材は始まった。

城内に一歩足を踏み入れると、何とも言えぬデジャヴュにおそわれた。それもそのはず、ホール夫妻が06年にデルネブルク城を購入するまで、ここはドイツを代表する画家、彫刻家ゲオルグ・バゼリッツの住まい兼アトリエだった。私自身も二度ほど訪問したことがある。

外観は一切変えられていないが、当時に比べて大幅に修繕が施されたのがわかる。

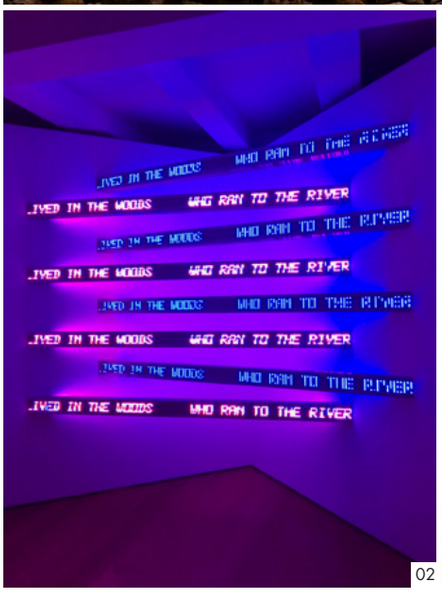
元修道院ならではの天井が高い礼拝堂は、かつてはバゼリッツがスタジオにしていた。今では展示スペースに様変わりし、スーパーリアリズムの先駆者マルコム・モーリーの船を描いたシリーズが展示されていた。その隣にはモーリーに船を描くのを勧めたリチャード・アーシュワーガーの一連の作品、そしてバゼリッツがもう一つスタジオとして使用していたスペースにはモーリーの弟子だったジュリアン・シュナーベルの

手前はバゼリッツの彫刻《シング・サング・ゼロ》(2012)。バルコニーにはゴームリーの《シート》(17)。

ジュリアン・シュナーベルの〈ポートレート〉が城の空間に調和する。

024-027_art.indd 25 2017/09/11 20:15:06

01



02

03

01 アントニー・ゴームリー《ヨーロピアン・フィールド》(1993) 現代美術家の登竜門ターナー賞受賞作。02ジェニー・ホルツァー《ストライプトクロス》(2008)。03礼拝堂だったスペースに展示されている英国のマルコム・モーリーの〈ナイト〉(2016) 他ペインティング。

024-027_art.indd 26 2017/09/11 20:15:08

横5メートルはあろうかという巨大抽象画群が展示されており、1960年代以降のアートの流れが見て取れるようになっていた。

毎年異なるキュレーターによる展覧会が企画され、7月から10月にかけて一般に公開している（要アポイントメント）。今年はモーリーの展覧会を含め同時に7つの展覧会が催されている。美術館も顔負けだ。

その中で、展示空間とアートとの関係で特に印象に残ったのが、イギリスの彫刻家アントニー・ゴームリーの展示であった。

日頃、アートには生活空間を新たな空間に変える力があると唱えている私だが、今回は逆に城の持つ歴史の重みが、現代のゴームリーによる作品に深みを与えているのをひしひしと感じた。

例えば、4万体もの小さなテラコッタの像からなる《ヨーロピアン・フィールド》（1993年、写真左頁01）。この膨大なテラコッタ群が鑑賞者よりもやや低い位置に展示されているために、見上げて必死に何かを訴えかけられているかのような錯覚にとらわれる。「格差問題や移民問題をどうするの？」「こんなにいろいろな人種（個々のテラコッタの色の濃淡がそう感じさせる）がひしめき合っている。なんとかしてくれ！」という声が聞こえてきそうでもある。

このような静寂の中で作品に向き合い、感情移入するというのは久しく忘れていた感覚でもある。絶えずスマホのシャッター音に煩わされ、しばしば立錐の余地もない大都市の観光化した大型美術館では、このような体験はできない。

ツアーはランチの時間になり（なんと所要時間5時間のツアーである！）、城内の食堂に向かった。

ランチのソーセージは美味だったが、それはさておき、ツアーの途中からホール氏本人が同行していることに気がついた。ランチ休憩をみはからって話しかけてみた。

気さくだが、眼光が鋭い。この目で瞬時に本質を見抜くのか、それがアートを見る眼にもつながっているのか、と勝手に想像する。実はホール氏は、ドイツ現代美術のジャンルでもトップコレクターとして知られるが、この城にはドイツ人アーティストの作品は一点も展示されていなかった。そもそも、ドイツ人の作品を展示することは城を購入した理由の一つだと聞いていた。単刀直入に聞いてみた。

ホール氏の答えは明確だった。

「ドイツ美術のコレクションを展示したい気持ちは山々ですが、昨年通ったドイツの法律がいかんせん曖昧なのです」

「と言いますと？」

「ドイツ美術の名品を保護し、国外流出をストップする効力がある法律なのですが、EUとの関係で拙速に作られたせいか基準がいかんせん曖昧で、弁護士も展示しない方がよいと言うので……」

万が一コレクションが押収されるリスクを警戒しての判断のようだった。我々日本人は本業以外のこととなると途端にガードが甘くなるが、常にいい意味でのビジネスマインドを失わないのはさすがである。

話は弾み、帰りのタクシーを待っている間に夫人とのツーショットをダメ元でリクエストしてみた。

「台所で？」とジョークで返すホール氏。

「いえ、ゴームリーの作品の前でお願いします」

かくして、Forbes誌にメガ・コレクターとして登場してもらうことに成功した。どこまでもカッコイイ生き方だと思った。Ⓕ

石坂泰章
アートアドバイザー／AKI ISHIZAKA社長。東京藝術大学非常勤講師。総合商社勤務、近現代美術画廊経営を経て、2005〜14年サザビーズジャパン代表取締役社長。数々の大型取引を手掛ける。著書に『巨大アートビジネスの裏側』（文春新書、2016年）など。

食堂はゲオルグ・バゼリッツのかつてのスタジオ。壁面にはデッサンが残る。

ホール氏とともに財団を支えるクリスティーン夫人。アートへの熱い思いを語る。

024-027_art.indd 27 2017/09/11 20:15:09